

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年10月17日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 理学研究科 化学専攻

職 名 准教授

氏 名 依 光 英 樹

| | | | |
|------------|---|--|-------------|
| 助成の種類 | 平成25年度 ・ 国際会議開催助成 | | |
| 事業内容 | 第10回カルボアニオン化学国際会議 | | |
| 開催期間 | 平成25年 9月23日 ～ 平成25年 9月26日 | | |
| 開催場所 | 同志社大学 寒梅館 | | |
| 参加者 | 総数 222名 | 内 訳 一般参加者124名 学生参加者68名 招待講演者20名 国際組織委員5名 同伴者5名 (国内から151名、国外から71名) | |
| 成果の概要 | タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有() | | |
| 会計報告 | 事業に要した経費総額 | 9,726,246 円 | |
| | うち当財団からの助成額 | 1,000,000 円 | |
| | その他の資金の出所 | (機関や資金の名称) 上原記念生命科学財団国際シンポジウム開催助成 永井記念薬学国際交流財団人材育成事業Scholarship 助成 | |
| | 経費の内訳と助成金の使途について | | |
| | 費 目 | 金 額 (円) | 財団助成充当額 (円) |
| | 会場費・設備費 | 1,840,000 | 959,740 |
| | 招待講演者旅費宿泊費 | 4,215,560 | 0 |
| | 会食費 | 2,253,491 | 0 |
| | 運営補助要員人件費 | 395,000 | 39,000 |
| 会議用消耗品費 | 163,215 | 1,260 | |
| 印刷製本費 | 454,900 | 0 | |
| 通信費 | 158,280 | 0 | |
| 開催準備会議費 | 245,800 | 0 | |
| 当財団の助成について | (今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 京都大学に寄付金として一旦預け、ここから支出する必要があり、手続きなどが煩雑となった。また、当初の予定通りの使い方ができなくなった。貴財団の問題点ではないが、改善できればより良い助成金となろう。 | | |

成果の概要／依光英樹

第 10 回カルボアニオン化学国際会議を、日本化学会、有機合成化学協会、日本薬学会、近畿化学協会、日本プロセス学会の後援のもと、平成 25 年 9 月 23 日（月・祝）～26 日（木）に同志社大学寒梅館（京都市上京区）にて開催した。組織委員長は富岡清京都大学名誉教授、同志社女子大学教授である。参加者数は 222 名と当初の想定よりも少し規模は小さくなったが、世界を代表するカルボアニオン化学者が集結し、素晴らしい講演と白熱した議論で盛会であった。

カルボアニオン化学は、カルボアニオン種の発生、構造、機能、ならびに化学反応を研究するための基礎的で複合的な学問である。根岸、鈴木両博士のノーベル化学賞受賞により、カルボアニオンを用いたクロスカップリング反応に脚光が当たったことは記憶に新しい。今日では、医薬品ならびに機能性分子材料の合成など、有機化合物の関与する物質科学と産業に欠かすことのできない研究分野となっている。こうした中、カルボアニオン化学の飛躍的発展を期すべく、世界を先導する研究を行っている我が国で本会議が開催された。

23 日初日は、京都大学工学研究科吉田潤一先生のオープニング講演で幕を開けた。フローマイクロリアクターを駆使して不安定カルボアニオン種を発生させ、高難度の結合生成反応を達成していくさまはオープニングにふさわしいものであった。その後、四件の招待講演、二件のショート招待講演が続いた。特筆すべきは日本人研究者の目覚ましい活躍であった。東京大学薬学系研究科内山真伸教授の亜鉛アート錯体を利用した新しい分子変換法、大阪大学工学研究科平野康次先生のアミノホウ素化反応、群馬大学工学研究科網井秀樹先生のトリフルオロメチル化は、いずれもオリジナリティにあふれ、世界のカルボアニオン化学者を圧倒するインパクトがあり、講演時間を過ぎても熱心に質疑応答がかわされた。夕方からはウェルカムミーティングで新旧の友情を確認し合った。簡素な会であったが、和やかな雰囲気のもとに 8 時まで続き、翌日以降の会議を盛り上げる役割を充分に果たした。

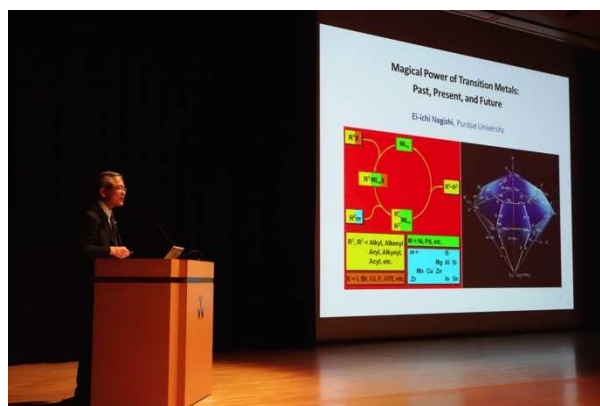


24日二日目は、フランスの Maddaluno 教授をはじめ招待講演 6 件、ショート招待講演 8 件、ポスターセッションから構成された。午後には、この夏にアルプスで遭難して亡くなった Schlosser 教授をはじめとするカルボアニオン化学の巨星たちへの追悼セッションが組まれた。彼らの残したカルボアニオン化学を礎として、さらなるカルボアニオン化学の発展を胸に誓わせるものであった。夜は招待講演者招宴が開かれ、夜遅くまでカルボアニオン化学の今後について議論が白熱した。

25日三日目は、台湾の Luh 教授の招待を皮切りに、招待講演 5 件、ショート招待講演 11 件、ポスターセッションがあり、大いに盛り上がった。Luh 先生のみならず、北京大学の Xi 教授、日本からの若手研究者の発表が充実しており、アジアの勢いをまざまざと見せつけるものであった。夜は大阪府立大学柳日馨先生の司会のもとバンケットが開催された。議長の富岡先生が京都での開催のいきさつに触れられ、ノーベル化学賞受賞者の根岸英一パーデュー大学特別教授より元気づけられるお話をいただき、ドイツのホフマン先生に乾杯のご発声をいただき、盛会となった。

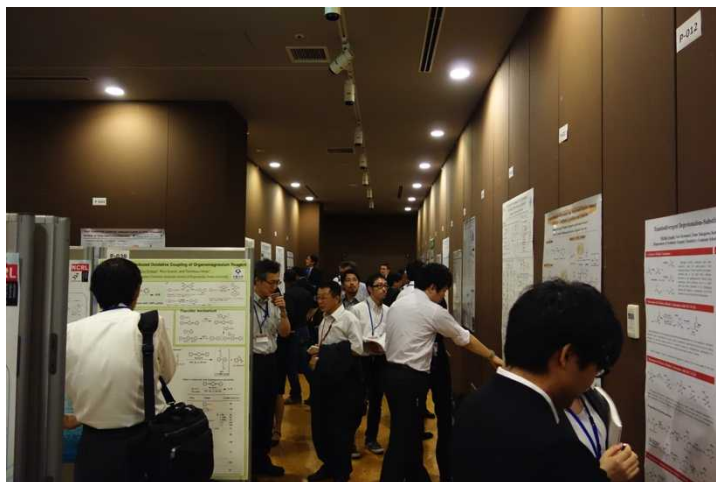


26日最終日は、招待講演 3 件、ショート招待講演 2 件に続いて、根岸教授より「*General and Highly Enantioselective ($\geq 99\%ee$) Catalytic C-C Bond Formation via ZACA Reaction*」と題する特別講演を賜った。カルボアニオン化学と遷移金属触媒を組み合わせる「マジック」について熱く語っていただき、聴衆は深い感銘を受けた。



受付では、和紙柄をベースにした和風の予稿集が大変人気であった。また、大河ドラマにちなみ、「八重さんボールペン」を記念品と実用品を兼ねて参加者に配布し、日本のソフトパワーで特に海外からの参加者を魅了することができた。

ポスターセッションでは、ホールのホワイエ部分をフルに活用し、100件を超える発表が行われた。学生を中心とする若手研究者が世界トップレベルの研究を進めているカルボアニオン化学者と活発に議論を行った。日本人学生がたない英語で必死に説明している姿を目にし、国際的観点に立った日本の若手有機化学者の育成に少なからぬ貢献をできたと考えている。



ショート招待講演は、助教、准教授クラスの若手化学者に招待講演の機会を持ってもらうべく、開催二ヶ月前に目玉企画として急遽設定された。いずれの先生も中身の充実したご講演を披露され、カルボアニオン化学の今後の益々の発展が期待される。

次回のカルボアニオン化学国際会議は、フランス Maddaluno 教授のリーダーシップのもと、ノルマンディー地方のルーアンで 2016 年に開催されることとなった。カルボアニオン化学の今後 3 年間での発展が大変楽しみである。

最後になりますが、貴財団のご援助のお陰を持ちまして、充実した会議を成功裡に終了することができました。この場を借りて深く御礼申し上げます。